

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行 瑞應寺

電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺

印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【十七】

後堂 門原 信典

三教老人の序⑥ 万象之中独露身
「災難にあうがよく候」

能登半島地震、航空機事故と天変地災の猛威、また同時に人災も含めて私達の営みの危うさに「無常の殺鬼の人をうかがうこと時としてその時ならずということなし」を実感する年明けとなりました。

地震も事故も含めてお亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りさせていただくと共に、ご遺族の方、また被災された皆様の身心安寧と一日も早く自らの生命を信じて前向きに生きて行かれることをお祈り申し上げます。

世界に目を向けましても、今この原稿を書いている最中にも、未だに和平の道は開かれず悲惨な戦争のニュースが流れています。様々な事件事

故、社会問題の渦巻く中に、ともかくも私達はこうして今佛道修行に向かわせていただけることを有り難く思います。

【新潟三条大地震】

良寛様が七十一歳の時、江戸の末期。

文政十一年（一八二八年、一九六年前）十一月十二日午前八時頃に新潟県三条市栄町を中心に大地震が発生しました。

記録に残された資料等でマグニチュードは6.9。現在の震度6弱になり、甚大な被害をもたらしました。

全壊した家屋が1万2,859軒、半壊8,275件、焼失1,204軒、死者1,559人、けが人2,666人と三条市史には詳しい被害の様子が記されています。いち早く発行された瓦版に

は「弥彦山は大きく崩れ、海の中へ押し出し、三条町・燕町・東御門跡御堂（東本願寺三条別院）・大門など残らず揺り倒れ、田畑・山川が崩れ、人馬・けが人はその数知れず、余震が十四日まで頻発した古今稀なる大地震」と報じられます。実際には余震は翌年の三月まで続きました。

更に与板という地区では全壊家屋264軒、焼失家屋18軒、死者34人負傷者118人、死んだ馬7頭。という被害がありました。

その与板地区には、長年良寛様と親交のある、町年寄で造り酒屋の山田家九代目太郎兵衛重頼こと山田杜臯という方が居ました。「杜臯」は俳諧や絵を趣味とされていたので号です。杜臯氏はこの地震で我が子を亡くされました。しかし、杜臯氏はそうした自分たちの被害もさることながら、良寛様も被災されたのではないかと、お見舞いのお手紙を送ります。良寛様がその頃に住まっていた島崎（現長岡市）は幸いにも一軒の全壊家屋もなく、良寛様も無事でした。手紙を受け取った良寛様は自分が無事であることを伝え、長年の友人である杜臯氏が大

地震に被災し、しかも子供を亡くして悲嘆にくれているところに次のような返信の手紙を送ります。

【良寛様のお手紙】

『地しんは信に大変に候 野僧
草庵ハ何事なく、親るい中死人もなく、めで度存候。』

うちつけに しなばしなずてながらへて かゝるうきめを見るがわびしさ

しかし災難に逢時節には災難に逢がよく候 死ぬ時節には死ぬがよく候。

是ハこれ災難をのがるゝ妙法にて候 かしこ 良寛

臘八（十二月八日）
山田杜臯老

「うちつけに しなばしなずてながらえてかかるうきめを見るがわびしさ」は短歌になっっています。

「うちつけ」は「突然に、思いがけない出来事」という意味もありますが「素直な思い」でもあります。『この度の突然の地震は本当に大変な事でした。私の住んでいる茅葺の庵は無事で、親戚にも亡くなつた人も無かつたのですが、私こそ被災し突然に命を失っていたかもしれせん。私は今

地震をまぬがれてこうして生き延びています。有難いことではありますが、被害にあつた人たちの事、とりわけあなた（杜臯氏）の悲しみ苦しみを知る事は、そのまま私の生きる悲しさ苦しさです』

震災という一つの真実に、何故こんな目に合わなければいけないのかと悲嘆にくれながら、良寛様の安否を気遣う杜臯氏。自分が無事なることに感謝し、そして友人である杜臯氏をはじめ被災された方たちのことを思い、また生き続ける事の悲しみを思われる良寛様。

良寛様はこの地震の三年後、天保二年（一八三二年）新暦二月十八日に行年七十四でお亡くなりです。

「裏を見せ表を見せて散るもみじ」良寛様辞世の句といわれているお歌があります。一枚の葉っぱに裏があり表がある。表だけ、裏だけと、どちらか一方を選ぶ事は出来ない。選ぶ事の出来ない真実を受け止め命を預ける以外に無い。それが私たちの坐禅、信仰、安心です。

そして、良寛様は「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候、死ぬ時節には死ぬが良く候。これはこれ災難をのが

るる妙法にて候」と杜臯氏に言われました。

【良寛様の失言?】

私はそもそも個人に宛てた人の手紙の内容を評価する事は出来ないと思います。

しかし、このお手紙を「良寛様の失言」であるとか、「災難の被害にあつてない人から被災者にこんな手紙は書くべきではない」或いは言葉尻をとって、「災難にあつてよい」という人がいますか」などと言われる方がいます。

或いは「災難に逢う時には災難と一つになってしまえ、死ぬ時には死と一つになってしまえ。そんな禅僧の境界を言われた」

「長年の友人である山田杜臯氏にふさわしい指導をされたのであろう。これこそ人を見て、その人に合わせた素晴らしい説法をされた」

更に「この手紙で山田杜臯氏を励まされた」等々言われますが、私は良寛様には杜臯氏を励ますとか、説法とか、そのような意図は微塵もなかったのではないかと思います。

お師匠様の国仙和尚様から法を伝えられた時に「良や愚の如く、道うたた寛し」とい

う偈を授かり、大愚良寛となられました。「愚」は「愚直」という言葉にも表されるように人間の功利主義、価値観を越えている事です。そして「良」と云う字には「信」と同じく「まこと」という意味もあります。「ただ縁に従い運に任せ、真実を全ていただき素直に寛き道を歩むのみ」禅僧としての境界を作る、人を救う、教化する、励ます、元氣付ける等は小賢しい謀り事です。そんな私たちの思惑を超えた「愚」のお姿。

【南無帰依良寛様】

良寛様が杜臯氏に宛てたお手紙ですが、今の私にとりましても、良寛様のお示しがとても有り難く心に響きます。この「よく」は、今の私のまま何があつてもみ佛様に見守られていく事です。

また、大切な事は、山田杜臯氏と良寛様とのお互いを思いやる絶対の信頼関係があります。

「よく頑張れと応援をしたり励ましたりするけれど、これはどんな言葉を言われたか、よりも、誰から言われたかが大切です。

普段から自分を理解して、親身になってくれる人から言われる事が大事、そうでない

人から言われると、今精一杯頑張っているのに、これ以上何を頑張ればよいのかと思ってしまう。逆効果です」というお話を伺ったことがあります。信頼している人としていない人。尊敬している人かそうでない人とは同じ事を言われても雲泥の差があるのは皆さんもよくお分かりだと思います。

杜臯氏は、良寛様を信頼、尊敬を超えて帰依されていたのです。「良寛様が、災難に逢うがよく候と言われたのだから安心して災難に逢いましう。死ぬがよく候と言われたのだから素直に子供の死を受け止めましよう」

良寛様のお手紙を読まれて、杜臯氏はおそらく「よく」真実を受け入れ、そして生きていく力を自らに見い出された事と推察します。そこにはいつも裏表無しの無垢清浄な良寛様に対する杜臯氏の絶対的な帰依、南無帰依良寛様のお姿が浮かんできます。

それが真実の信仰です。私たちは信仰と云うと、お陰がある、幸せになる、自分の思い通りになる、そういう駆け引きしか考えません。

そうではない。裏表無しとは、裏も表も全てをいただき、

それを糧として生きて行くところに無垢清浄なる蓮華が咲くのです。それが「にぎり江に根を培いて咲きいずる蓮の花をみ心にして」という橋本老師のお歌に通じます。

この「災難に逢がよく候死ぬがよく候」は良寛様の安心。良寛様の安心はそのまま杜臯氏の安心でした。

【同事行】

そして良寛様はその後、三条の街の惨状を詳しくご覧になられて歌を詠まれています。「ながらんことや思いしかくばかり 変わり果てぬる世とは知らずて」

「かくかくに 止まらぬものは涙なり 人の見る目も忍ぶばかりに」

無常の世を生きて行く事の辛さ、悲しさ。そして人の見る目にも関わらず涙が止まらなかったと。そこには「万象之中独露身」全てを自分の事と受け止める良寛様の生命の風景があります。

私達は今こうして修行道場に共に辦道する身心ですが、どんな人でも、どんな思いを持っていても、ここでの修行は個人持ちの、私の為だけの修行ではありません。三帰礼

文はじめ修行の偈文には必ず「当願衆生」つまり「まさに願わくは衆生と共に」と云う誓願があります。この私の修行は生きとし生ける全ての人と同事行の修行。衆生だけではない尽大地、大地を尽くす「万象之中独露身」の修行でした。万象と共に修行するのです。

正法眼藏唯佛与佛の巻に「佛の行は、尽大地とおなじくおこなひ、尽衆生ともにおこなふ。もし尽一切にあらぬは、いまだ佛の行にてはなし」とお示しです。私の中身は尽生命、尽空間、尽時間、尽出会。つまり尽三世十方があつて、今この修行「佛の行」があるのです。

こんなことやつていて私の人生の役に立つのか?

自分が果たして人様の為に、世の中の為に役に立っているのか?

何故ここまでして生きて行かなければならないのか?

そんな私の疑問も全部ひつくるための佛様の修行です。

私の生命も私のものではありません。借りものです。お預かりしているだけです。

み佛様はこの世界に満ち満ちて、どこにあつても何があつても仏法は現成しています。

「佛身は法界に充滿し、普く一切群生の前に現ず」と回向文にあります。

私の役に立つとか立たないとかの、世間相場のちつぽけな修行では無い。それが無心

無我です。「願わくはこの功德をもつて普く一切に及ぼし我等と衆生と皆共に佛道を成ぜんことを」み佛様、どうか私達に、誓願に生きる力を与えてください。 合掌(続く)

テレホン法話 (〇八九七) 四一〇〇三三

禪のたより



◆光に包まれて

皆様それぞれに新春の光をいただき、新年をお迎えの事と存じます。

この光を私たちはみ佛様の光明と言います。

この光明は私達がどんな辛い時にも「生きていつていいよ」と語りかけて下さる生命の光です。

詩人の堀口大学(一八九二年〜一九八一年)が一九六七年、昭和四十二年の新春の歌会初めて詠んだ歌があります。

「深海魚光遠きに住むものは ついにまなこ(眼)をうしなうとあり」

当時多くの人に感動と共感をもたらしましたが、私は十歳の時で知る由もありません。

一般的には現代の人間の生き様をうたいあげたものと評

価され、当時の多くの人に感動と共感をもたしました。

その頃も人間は当に「光遠い」生活、生き方をしていたのです。

五十年過ぎた今日、連日目をそらしたくなるような、信じられない痛ましいニュースばかり流れ、光が遠いよりも、光も当たらず時代となってきたように思います。

しかし、本当は、みんな同じようにみ佛様の光に包まれて、みんな光り輝いているのです。

それに気が付かないのが「光遠い生活」です。光に包まれている事に気付かない闇の生活。

闇とは何でしょうか。貪り、瞋り、愚痴に始まる様々な煩惱です。

光に気が付かないが故に憎しみ、争い、分裂、疑い、絶望の「光の当たらず世界」にな

るのです。社会ばかりではなく自分自身がその闇に気付かなければならないのです。

「闇が光になることできぬ、光のおかげで闇がしるるよ」これは妙好人、浅原才一の言葉だと思います。

私達は闇の中にあるのですが、自分だけでは闇に包まれている事に絶対に気付かないのです。光に出会ってこそ初めて自らの闇に気付きます。

目覚めるとはその事です。

その光とは、私たちの無明の闇を照らして下さるみ佛様の光明です。

それがあつて私達の闇「貪り、瞋り、愚痴」が見えてくるのです。

見えてくると、貪りの心が施しの心に、怒りが優しさに、愚痴の心が感謝の心に転換するのです。

み佛様の光明に照らされてこそ、お互いを認め、許し、信じ、お互いに支えあい希望に満ちた世の中が生まれてくるのです。

今年こそ、み佛様の光に包まれた温かい世界になりますように。

瑞應寺専門僧堂後堂 門原 信典 合掌
令和六年一月一日〜十日

新春書初め

黙如膏

月面舟行江練淨也
随州上流痕也
中流の音揚後居録
第三回外は定未

福聚海無量

能采自然采

一筆解五茶

古松談般若

幽鳥弄真如

月清風拂明



大晦日 スカイルンタン境内を彩る

三朝大般若祈禱

正月一日より三日間、朝課時法堂にて大般若転読祈禱を厳修。須弥壇に供えられた般若札は三日間の祈禱の後、当山檀信徒各家に配られる。



首座法戦式

今冬首座、飯島慈皓士の法戦式が一月十八日(木)に修行され、「永平頌古 身心脱落」に就いて法問を戦わせた。当日は、僧堂諸役寮師、梅花講、和敬会等随喜した。



法戦式

寒修行托鉢

恒例の寒修行托鉢が一月十九日(金)より三十日(火)まで修行され、山内大衆、役寮諸師共に、上部地区を中心に新居浜市内を浄行乞食。浄財施者十方檀那に深謝。



寒修行托鉢

一月の日鑑

- 一日 大般若祝禱諷経 歳朝人事・年賀ノ拝
- 二日 角野消防団初祈禱 寿餅ノ拝
- 三日 年頭総代会 おねはん受付開始
- 七日 日曜参禅会 参玄会(十一日迄)
- 九日 祝禱・略布薩 法戦式
- 十五日 観音講・勉強会 寒行托鉢(卅日迄)
- 十九日 略布薩

二月の予定

- 一日 祝禱
- 五日 涅槃摂心(九日迄)
- 十四日 土地堂念誦
- 十五日 祝禱・小参・人事行礼 涅槃会・略布薩
- 十八日 観音講・勉強会
- 十九日 金毘羅初大祭 (旧一月十日)
- 廿八日 略布薩

銀杏感謝録

- 島根県 浄心寺 殿
 - 広島県 運西寺 殿
 - 千葉県 鶴岡直江殿
 - 愛媛県 西願寺 殿
 - 神奈川県 泰翁寺 殿
 - 北海道 龍澤寺 殿
 - 山形県 小原寺 殿
 - 北海道 天龍寺 殿
 - 京都府 鳥越万寿子殿
 - 神奈川県 東昌寺 殿
- (令和五年十月三十日受付迄)

令和六年一月一日号表紙、地区総代に

- 二区 本田 龍朗
- 六区 村上 義幸

の二名が表記もれでした。お詫び申し上げます。

講演会のお知らせ 医僧がおしえる 健康のコツ

「喫煙は一仏両祖の教えに反します」
講師・とげぬき地蔵尊高岩寺住職 来馬明規老師
日時 令和六年二月十六日(金) 十九時
場所 瑞應寺 瑞雲閣



鐘 声

正月の慌ただしさもすっかり落ちついて僧堂の生活も元通りのものとなりました。新年を契機に心機一転してまた一から修行に励もうと決意しましたが、一日一日を過ごすうちにそうした意識が薄れていくのを感じます。

「初心忘れるべからず」と言いますが、修行においても実践すべき教訓であると思いました。

道元禅師の言葉にもこの教訓に通じるものがあります。「二発菩提心を百千万発するなり」仏道を求める心、つまり初心を何千何万回と起こすという言葉です。

初心無くしては坐禅も何事も大成させるのは難しいことかもしれません。そう思うと初心の意義や尊さを痛感します。

私の瑞應寺での修行の日々はまだまだ続きます。初心を貫徹してこの日々を過ごしていこうと思えました。

今冬首座